

## 井上隆明著『東北・北海道俳諧史の研究』

矢羽 勝 幸

地域による俳諧史の研究は、近年ようやく盛んになりつつあり、市・町・村史においても相応に頁が増加する傾向にある。芭蕉・蕪村・一茶と当地との関連のみに触れて済ませていた三、四十年前の地方俳諧史は、さすがに影をひそめている。

俳諧は、地方の庶民文化の原点であり、初等教育としての重要な側面を持っていた。

（俳諧は）俗談を交へて格別もの学びなくとも先づ入り安く、田夫野人に風情を学ばしむる道なり。道に入てよく修する時は、又和漢の学広く学ぶにしくはなけれども、学文と言ひてはいとむづかしければ自ら入り難し。俳諧の俗談よりいとたやすげに入り始めて月日を経るままに学ぶともなく、彼を聞き、是を見て終には和漢の学に近づくべし。又一つには風情ある時は、邪智愚智を知り、理と理窟との界を悟り、執著の念をはなれ、心の転じ易きこと世人の一助ともなるべきものなり。……暇もなく常に農業、商業にのみ日を送る、いとせはしき身にも、格別の暇もいらねば俳諧にてもせぬには優るべし。一生涯下手にても苦しからず。子孫の為に少しも心懸けてあらば、子孫もまた心懸くべし。

俳諧研究は、単なる俳人の履歴、中央との交渉を記すだけでなく、庶民の心情、文化の特色と傾向、享受階層等に触れるものではないであらう。

本書の著者井上隆明氏は、秋田経済法科大学及び短期大学の学長をつとめるかたわら近世の書林、板元、彫師等を集大成した『近世書林板元総覧』や『文学と地方文化論』『落首芸芸史』、近世の戯作研究『喜三「戯作本」の研究』『江戸戯作の研究——黄表紙を主として』『平秩東作の戯作的歳月』など膨大な著作を公にしている。以前秋田市の書店で井上氏の『秋田のプラスチック』（？）という著書を拝見し、その広範な学問的関心のありように舌を巻いたことがあった。自らは、比較文学から近世戯作文学が専門と著書に明記されている。しかし、今回の『東北・北海道俳諧史の研究』によって俳諧研究もむろんその専門分野に加えられるはずである。

本書は、書名によって知られるように福島、宮城、山形、秋田、岩手、青森、北海道（松前に限定）の一道、六県にわたる地方俳諧史である。道、県ごとに次のような統一した構成をとっている。

- 一 導入
- 二 当国一見
- 三 地域別俳諧史
- 四 俳書入集状況
- 五 地元資料

核を成すのは三である。

一「導入」は、各県の代表的な歌枕を能楽等の例を引きながら紹介、その県の文学的イメージを総括する。宮城県、秋田県、岩手県の平泉といったぐあいである。

二「当国一見」は、県の歴史や俳諧史の概観であるがその県を代表する俳人を登場させている。

四「俳書入集状況」は、県の内外で刊行された近世俳書に入集するその県内俳人を年代順に列記し、研究者の便に供している。作品は掲げず、すべて人名だけである。本書巻末には、人名索引が用意されているが、本項に登場する人名は収録されていない。内容が重要なだけに、いっしょに索引に組み込まれたら利用者にとってかなり便利なものになったにちがいない。

五「地元資料」は、人名別（五十音順）による著作、関係資料一覧であるが、所蔵者や翻刻書名が明記されていて利用するに便利である。

三「地域別俳諧史」がいわば本論である。各県を三、四分して地域ごとに年代順に俳諧を概観するが、大よそ人物を中心に記述する。略伝、著作、諸家との交遊、生・没年を諸家の説、自説をないまぜて簡潔に記述する。自身蒐めた資料にもよるが、市・町・村史や既刊の伝記などを最大限に活用している。

個人伝記以外に芭蕉塚、句碑、俳額なども頻繁に紹介、それらの写真も多く挿入されている。

著者は本書をまとめるにあたり「出張などのついでに年次休暇をとり、付近の町を尋ねまわる段階にすんだ。資料さぐり、墓

さがしである。この十余年東北の主だった町に足を運び、函館・松前・江差には三度訪れた。」という。

おそらく最初は、その研究対象を自らの居住する秋田県にしばっていたであろうが、しだいに的を広げ、東北地方から北海道へと拡大していったはずだ。まずその視野の広さに驚嘆する。県単位の俳諧史は数多いが数県を網羅するものは、『東海の俳諧史』（昭和四十四年刊。さるみの会編著）、『近世九州俳壇史の研究』（昭和五十八年刊。大内初夫著）ぐらいである。『東海の俳諧史』は複数者による執筆でしかも記述が県単位ではない。『近世九州俳壇史の研究』も県単位の記述ではない。

一道、六県にわたる広範な俳諧史をまとめる意図について著者は「北辺において俳人たちがいかに原風景を探り、いかに友をもとめ、いかに句作していったかをたどったかった。かれらの生と表現が、北という風雪の国を解くキーになればと、顔貌と発音をあつめたく思ったことだ。その作業がいつか俳諧史になっていった。」「（おわりに）」と記している。「平成七年、繁忙な職務にいたので、一県ずつ読み切りにできる本稿を、年二回刊の紀要に連載し」（「おわりに」）たのが本稿のもとだが、県別の記述にしたために、北海道を含めたみちのく全体の俳諧の特徴をまとめる項がなく、全体の特徴をつかみにくくしているのはやや残念である。

先に略伝中心と記したが、著者ならではの手が見えたい論述も随所に散見できる。「おくのはそ道」の旅で芭蕉たちを厚遇した仙台の北野屋加之の人物調査、秋田市八橋の大窪祖寛について、赤穂

討入り其角偽筆書簡の宛名によく利用される文鱗について、秋田、青森等に度々現われる菅江真澄と俳人との交流、真澄が北海道へ渡る謎などもこの著者ならではの深い読みが示されていて圧巻である。

松窓乙二は二度にわたって北海道に渡り、斧の柄社に長期滞在しているが、その行動の真意は風流三昧のためだけではなく、「当然片倉氏（白石城主）に現地の情報を知らせる責務があったはず。」とする。乙二に従った太呂も仙風も「情報のレポ役を兼ねて」いたというのも達見といえよう。確かに斧の柄社周辺の社会情勢を考えれば、そう考えるのが自然である。

松前頼完こと文京が江戸戯作界において大きな活動を持ったことも詳述されていて松前藩の俳諧を考えるうえで参考になる。

江戸で活躍後、武州本庄、最上、酒田と遊歴した常世田長翠は文化十年六十四歳で他界するが、その死没地について酒田舟場町、武州、宮海入水と三説が紹介されている。武州説は何を根拠にしたものか不明であるが、ありえない説である。

長翠の享和二年十一月酒田胡床庵落成（二六七ページ）は、二〇七ページの「（享和二年谷地（西村山郡河北町）に転じ……）」の事実よりみて谷地の庵落成の可能性が高い。

盛岡の平野平角宅を訪れた俳人たちの中に白雄の名前がみえるが（三六三ページ）これも何かの誤りであろう。白雄の奥羽行（安永二年）は、平泉までで盛岡には及んでいない。白雄と平角の交

渉は、平角の「しばふくかぜ」に白雄の一句が採られているのみで直接対面はなかった。白雄の『春秋稿』にも平角の作品は皆無である。

俳諧史のまとめ方にはいろいろあり、最近文学と無縁な歴史家が地方俳諧について言及する場合が目立つ。彼らの視点は作品の出来、不出来には触れず、在村文化全体における俳諧の役割や実業との関係を冷静に掘り下げ一定の成果を上げている。本書も伊勢商人や三井家と三千風との関係などを詳細に触れ、刺激的な論が散見されるが、全般的に在村文化における俳諧の文化史的位置付け等の視点は見られない。その反面著者の筆は、人物の内面や心情に触れ、きわめて文学的である。その点従来の地方俳諧史のいずれにもないみずみずしい筆致で対象を活写されている。

いままで岩手県、秋田県以外、県単位のまとまった俳諧史書がなく、今後も本書の果たす役割は大きい。本文はもちろん、「俳書人集状況」「地元資料」の項は大いに活用されることであろう。文学的でかつ該博な本書は、今後地方俳諧史をまとめるにあたり、多くの指針を提供するはずである。できうるならば、本書をもとに、著者による県別の俳諧史を望みたいところである。長期にわたる資料の蒐集・調査と成稿の御努力に対し深甚の敬意を表するものである。

（二〇〇三年六月 新典社 A5判 五五七頁 税込一四七〇〇円）